

スコットランド初期教育における「卓越のためのカリキュラム」と「アクティブ・ラーニング」：解題

梨本 加菜（児童学科・准教授）

“A Curriculum for Excellence” and “Active Learning” in Early Education in Scotland: A Bibliographical Review

Kana Nashimoto

Abstract

A Curriculum for Excellence (CfE) implemented by the Scottish Government established a coherent framework for education of all students aged from 3 to 18. The *Building the Curriculum* (BtC) series provides practical guidelines for CfE and a concept of “active learning.” This article outlines a curriculum transformation in the early stages and some measures to support continuity between preschool and the first year of primary school (P1) and beyond in Scotland. While increased attention was paid to literacy and numeracy in the 1999 curriculum for ages 3-5, BtC2 in 2007 underlined the high priority of “active learning” including purposeful play. BtC3 in 2008 presented an interactive and holistic learning approach and established partnerships among all preschool P1 settings, including the public, private, and volunteer sectors.

Key words : A Curriculum for Excellence, Building the Curriculum, active learning, early education

キーワード：卓越のためのカリキュラム、カリキュラムの構築、アクティブ・ラーニング、初期教育

1. スコットランドの初期教育カリキュラムの意義・構成

(1) 問題の所在

スコットランド政府による「卓越のためのカリキュラム（以下、CfEと記す）」は、「3歳から18歳まで」を包括する画期的で意欲的な構想である。特に2009-2010学校年度より完全実施される、従来の「3歳から5歳まで」と「5歳から14歳まで」が統合されたカリキュラムが注目される。学習の内容・方法が大きく異なる幼児教育と学校教育は、新しいカリキュラムにおいてどのように接続され

るのか。本稿は、CfEの手引きである『カリキュラムの構築（以下、BtCと記す）』¹⁾のうち『2 初期教育におけるアクティブ・ラーニング（以下、BtC2と記す）』²⁾と『3 学習・指導の枠組み（以下、BtC3と記す）』³⁾で示された初期教育カリキュラムを紹介し、特にアクティブ・ラーニングの概念と政策的意義、また小学校への接続に向けたカリキュラムの構成と課題をまとめる。

新カリキュラムは年齢段階を5つに分け、一番目の‘Early’を「就学前（Pre-school）と小学校1年（P1）程度」としたことは注目される。つま

り幼児教育と小学校低学年が一つに統合され、就学前・後をつなぐ学習支援が構想されることとなった。したがって本稿では、‘Early Years’や‘Early Education’を「就学前教育」「幼児教育」とは訳し得ず、「初期教育」と訳す。そして、具体的には3歳から5歳児程度が対象の新カリキュラムを見てゆく。

この「初期教育」という設定はイングランドの教育改革とも重なる。2007年に「(乳幼児)初期教育基礎段階 (Early Years Foundation Stage = EYFS)」が公表され、2008年5月に改訂版も刊行された⁴⁾。日本との比較研究は埋橋玲子⁵⁾および榊瑞希子⁶⁾に詳しいが、EYFSは誕生から5歳までを対象とした学習・発達・チャイルドケアの統合的基準で、きわめて詳細な6領域の学習・発達基準と、「シュア・スタート」に代表される福祉や社会的包摂 (social inclusion) の視点が盛り込まれた施策である。特に40-60ヶ月児については、発達課題として学校教育への連続の基準が示された。

スコットランドは2010年に公表予定の「誕生から3歳まで」のカリキュラムをもって「0歳から18歳まで」を貫徹させようとしている。イングランドと同様、生涯学習 (life-long learning) の観点から18歳以下の総合的カリキュラム構築と、特に社会的格差・貧困を念頭に置いた福祉施策の必要が背景にある。エビデンス・ベースとも称される、評価や実践を積み上げていく政策策定の特徴も類似している。しかし、イングランドと異なるのは、あえて詳細な基準を設けず理念的・大綱的な枠組みを示し、学校・施設や教師・スタッフの裁量を広げた点である。厳格な査察制度のもとで教育機関や教師の権限や社会的権威が保たれており、1988年のナショナル・カリキュラムおよび全国テスト導入時も議論を経て適用された経緯がある。今回の(乳)幼児期カリキュラム改革では、最初からイングランドの詳細な基準策定とは性格の異なる方向を歩んだと言える。

幼児教育と学校教育の接続の問題は、「小1プロブレム」、「ギャップ」などと言われるように、日本でも俎上にある。特に小学校低学年では、幼

稚園や保育所で行われる「遊び」や体験活動を、教育の内容・方法としていかに位置づけるかは古今を問わず課題である。また、制度的な問題もある。日本の就学前の子どものほとんどは幼稚園か保育所に通い、後者が半数を超えるようになった。「幼保一体化」も視野に収め、就学前の教育施設として、乳幼児施設の機能は変容しつつある。スコットランドでは公的施設からボランティアな家庭的保育まで、さまざまな施設とスタッフで共有できる基準づくりを目指している。就学年齢は4歳6ヶ月から6歳のあいだで日本より若干早いものの、幼小連携を前提とするカリキュラム構成や、「遊び」の学習内容・方法に代表される初期教育の構想は、きわめて示唆に富むと考えられる。スコットランドの教育は、OECDの調査等でも高い評価を得ているが、その実態はほとんど日本では紹介されていない⁷⁾。

(2) 初期教育カリキュラム改革の経緯と背景

2000年以降のスコットランド政府の子ども対象の政策はフォーマルな教育だけでなく、福祉、雇用なども含め総合的である。特に幼児教育関係の文書を抜粋したものが【表1】である。この10年間で多くの施策・方針が打ち出され、それらを裏付ける調査や評価もなされたことがわかる。経済協力開発機構 (OECD) も、スコットランド政府の求めに応じて学校制度のパフォーマンス評価と教育改革に対する助言を行った⁸⁾。こうして、2008年12月の政府と地方当局会議 (COSLA) による「初期教育の枠組み」⁹⁾で、教育領域のCfEと総合的な福祉政策である「正しくする」¹⁰⁾が、「子ども中心 (child-centred)」で「成果に焦点化された (outcome-focused)」施策として確立された。いまやCfEは、子ども政策における二本柱の一つとなったと言える。

カリキュラム改革が急速に進んだ背景には、1999年のスコットランド議会発足にともない必然的に新しい制度が求められた一方で、政府のカリキュラム部の専門アドバイザーが述べる通り¹¹⁾、「政府主導でなく、地方のニーズに対応するため、地方の方から」進められた側面がある。スコット

表1：1999年以降のスコットランドの主な初期教育カリキュラム関連文書

1999年	スコットランド・カリキュラム協議会「3歳から5歳児のカリキュラムの枠組み」
* 2001年6月	経済協力開発機構（OECD）「幼児の教育とケア（Starting Strong）」
（2002年	スコットランド教育会議
2003年11月	カリキュラム検討委員会設立
2004年11月	「卓越のためのカリキュラム：カリキュラム検討委員会」「大臣による回答」「意欲的で卓越した学校：行動のためのアジェンダ」
2005年	スコットランド学習・指導（LTS）「誕生から3歳まで：幼い子どもたちを支える」
2005年	LTS「初期教育特別文書シリーズ1：教育について語ろう」
2006年	LTS「初期教育特別文書シリーズ2：子どもの声を聞くことについて語ろう」
2006年	「卓越のためのカリキュラム：前進と提案」
2006年	LTS「学習のアセスメント：セルフ・アセスメント・ツールキット」
2006年2月	（S.スティーブン）「初期教育：海外文献のレビューによる展望」
2006年2月	教育省（SEED）「初期教育：海外文献のレビューによる展望」
2006年2月	王立教育視察官（HMIe）「スコットランドの教育の向上：2002-2005年」
2006年3月	「卓越のためのカリキュラム：進展と提案」
* 2006年9月	OECD「幼児の教育とケア（Starting Strong）II」
2006年11月	「カリキュラムの構築1：教科領域への貢献（BtC1）」
2007年	「カリキュラムの構築2：初期教育におけるアクティブ・ラーニング（BtC2）」
2007年3月	HMIe「中心にいる子ども：初期教育における自己評価」
* 2007年12月	OECD「スコットランドの教育成果の質と公正に関するレビュー」
2008年	「就学前教育と初期の家庭的教育：スコットランド政府とCOSLA（地方当局会議）の政策提議の融合」
* 2008年5月	＜中央政府＞子ども・学校・家庭省（dcsf）「初期教育段階の実践的手引き：誕生から5歳までの学習・発達・ケアの基準（EYFS）」
2008年6月	「カリキュラムの構築3：学習と指導の枠組み（BtC3）」
2008年9月	「あらゆる子どものための『正しくする（getting it right）』の手引き」
2008年12月	「初期政策の枠組み」、「初期政策の枠組み（その2）」
2009年1月	HMIe「スコットランドの教育の向上：2005-2008年」
* 2009年2月	EU（Education, Audiovisual and Culture Executive Agency）「ヨーロッパにおける早期子ども期の教育と保育：社会的文化的不平等の取組」
2009年10月	LTS（シンポジウム）「初期教育：遊びとアクティブ・ラーニング」
2009年10月	「カリキュラムの構築4：学習・生活・仕事のためのスキル（BtC4）」
2010年1月	「カリキュラムの構築5：アセスメントのための枠組み（BtC5）」

○ ゴシック体はスコットランド政府「卓越のためのカリキュラム（CfE）」のシリーズ

○ * 印はスコットランド政府や関連機関以外による公的文書

ランドはロバート・オーウェンや、モントリアル・スクールを生んだアンドリュー・ベルの縁の地であるが、保育はチャイルド・マインダーやプレイ・グループ、託児所（creche）などの地域の自助的・私的なサービスに支えられてきた伝統があり、フォーマルな就学前・幼児教育の制度は十分に確立されてこなかった¹²⁾。

いかに多様なサービス提供者による保育や「教育」の質を保証するかという課題に加え、2000年スコットランド法で示された学校基準により、2002年より地方当局はすべての（親が希望する）3、4歳児に就学前の施設を保障することとなった。原則的に1回約2.5時間のセッションを週5回以上、無償で提供するもので、急速に公的サービスが普及する契機となり、地方行政と施設は眼前の対応に迫られることとなった。前述のOECDの報告（2007年）によると¹³⁾ 3歳は8割程度、4歳は9割以上が就学前施設に通うようになった。全国で2,700以上の就学前センターがあり、うち42%は小学校附属の公立ナーサリー・クラスとの複合施設である。他は独立したナーサリーまたは子ども・家族センターの部局で、28%のみが公的な資金を得ており、35%は私立で、36%はボランティアな施設である。多様なサービス提供者が共有できる「拠り所」が俟たれたと言える。

また学校教育政策において多くの指針が混在しており、それらの整理（‘de-cluttering’）¹⁴⁾は当初からの課題であった。そしてCfEは3歳から18歳まで、最終的に誕生以降を一貫させるカリキュラムとなった。教育・学習の理念や原則、指標を図式化したものが【図1】である。カリキュラムの核として「責任能力ある市民」「継続的な学習者」などの4つの教育目標と、スキルとしての読み書き能力（literacy）や計算能力（numeracy）などがあり、周りに既存の政策に由来する指標が整理されている。「就学前」の3歳から5歳、また小学1年も、この全体像の「初期」として位置づけられるようになったのである。

2. 初期教育におけるアクティブ・ラーニング

(1) アクティブ・ラーニングの概念と導入の背景

2007年のBtC2は、初期教育の方法として「アクティブ・ラーニング」を掲げた。それは「現実と想像の場面を駆使して、子どもの思考を巻き込み挑発する」学習方法で、かねてから国内外で「生きるためのスキル・知識や学習への積極的な態度を向上させるための適切な方法」として認められてきたと強調される。具体的には、「自発的な遊び」や「計画的・意図的な遊び」、「調べる、探求する」、「行事と生活経験」、「学習・指導への特化」の学習機会によって代表される。つまり、小学校以上で「表現芸術」や「言語」などの8つに分かれるカリキュラムの領域の基礎となる、具体的にはあらゆる環境・場面で「遊び（play）」や「活動（activities）」を通して子ども主導型で行う、全体論的な（holistic）学び方が示されたと言える。また、屋内だけでなく屋外・野外でのアクティブ・ラーニングの重要性が示されたことにも特徴がある。

アクティブ・ラーニングの理念や方法は、イングランドのEYFSのような詳細な定義や基準があえて示されていない。やや定義が曖昧ながらもアクティブ・ラーニングが提唱される背景には、第1に社会政策的な意図と現場の意図の合致があると言える。スコットランドでは前述のOECDや教育視察官（HMIe）¹⁵⁾の報告書などで一定の評価は得たが、同時に経済的貧困にあえぐコミュニティや低い社会経済層（職層）の家庭の子どもへの成績不振が指摘されてきた。何らかの職業資格を取得しないまま中等教育から離れる者や、若者の貧困、離職も多い。OECDは義務教育の中等学校の学習経験が公正でないと、職業資格課程の複雑さを指摘した。学習成果（単位・学位）や職業資格が構造的に満たされない家庭の子どもを考慮した制度改編や学習支援は急務であり、子どもが取り組みやすい体験や「遊び」や「活動」の強調は、現実的な選択肢であると言える。

第2に、学校教育の教科カリキュラムへの接続に対する現場のとまどいが、アクティブ・ラーニングの導入を支えたと言える。1997年の就学前段階のカリキュラムおよび1999年の改訂版では、基本的な読み書きや計算の能力、また学習成果

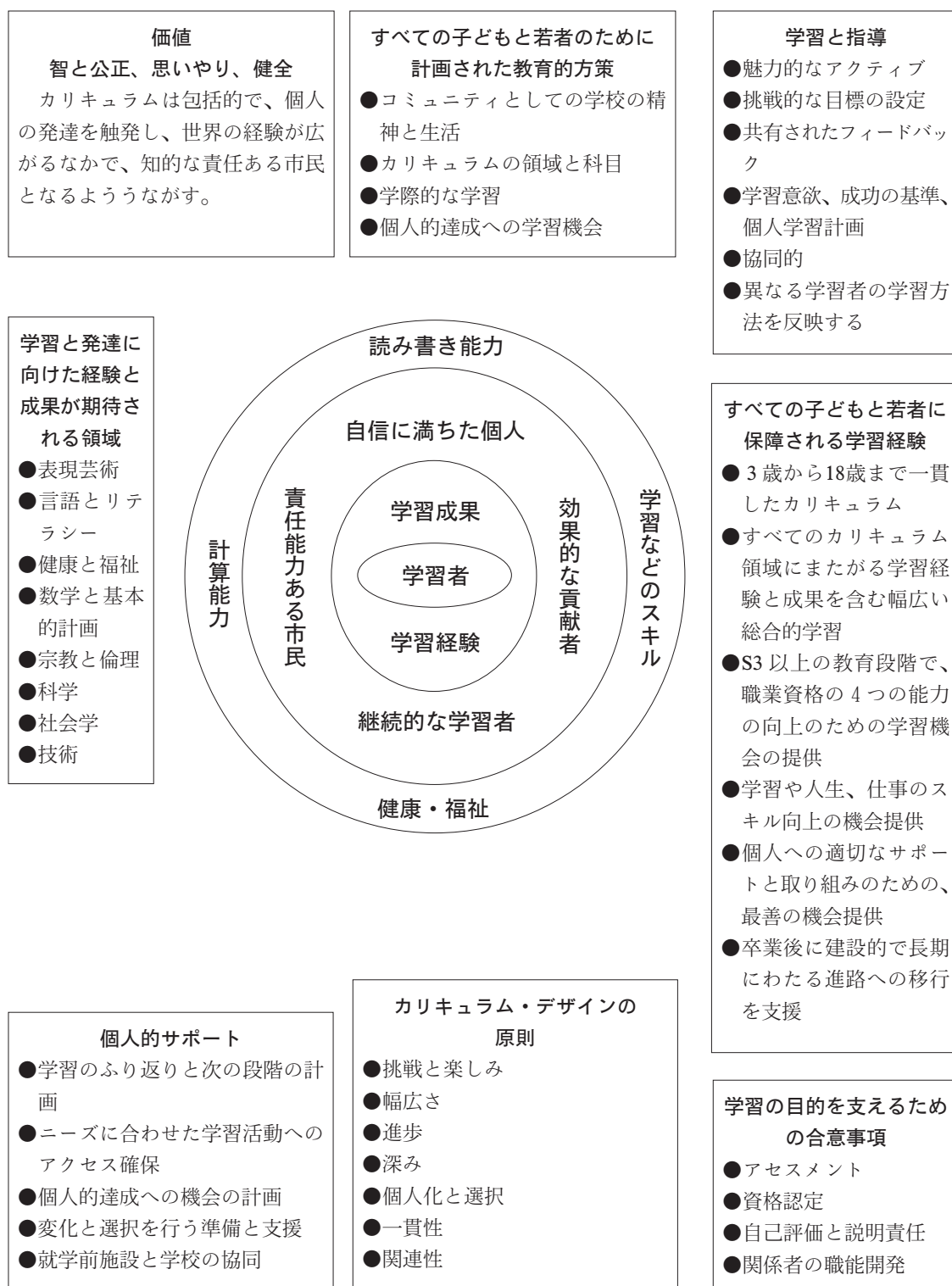


図1：3歳から18歳のニーズに対応したカリキュラムの枠組み

(outcomes) が重視されるようになった。また社会的な公正 (justice) や包摂 (inclusion) の視点から、将来的な職業資格やアセスメントに至る道筋も重視された。就学前課程を学校教育の「準備」でなく「初期のスタート」と位置づけ、スタッフも「教育者 (educator)」として保育者としての機能が薄らぎ、幼児教育の独自性が矮小化される危機感があった¹⁶⁾。BtC2 は、初期段階の子どもの発達や学習方法の独自性を打ち出す意図があったと言える。

第3に、「省察的实践者 (reflective practioners)」としての教師像に沿う教育理念・方法を採用からではないか。「省察的实践」は個人やグループで実践の省察を繰り返すことによって力量を形成する専門職論で、看護職や福祉職などの養成でも注目されている¹⁷⁾。スコットランド政府は、ナショナル・カリキュラムの開発・普及は中央政府の指針による「滝状の」モデルであったが、これからは「最初から (省察的实践者である) 教師が自らの教育の目的や価値、また自らの教育実践を考える」ことを目的とし、教育実践のエビデンスにもとづいてカリキュラムが「次第に変化する」とした¹⁸⁾。こうした教師・教育像において、アクティブ・ラーニングは齟齬のない理念・方法であると考えられる。

例えば、2009年10月に CfE の実質的な運営機関であるスコットランド学習・指導 (LTS) が主催した初期教育シンポジウム「遊びとアクティブ・ラーニング」では、シンポジストからアクティブ・ラーニングの定義や他の教育理論との関係性、教師の権限や自律性が課題として指摘されている¹⁹⁾。CfE の核としてのアクティブ・ラーニングは、「省察的实践者」としてのスタッフの専門性こそ不可欠な要素であると言える。

(2) アクティブ・ラーニングの実践とCfEにおける位置

BtC2 で、アクティブ・ラーニング実践の原則は、以下の5つにまとめられている。

- 1) 子どもの発達と学習の発展 (progression)
- 2) 学習と発達の継続的な支援

- 3) 学習やスタッフ、学習支援の環境
- 4) 保護者を巻き込むこと
- 5) 継続的な職能開発

学習へのアクティブなアプローチは小学校1年生以上にも継続されることが重要として、特に1)と2)では、アクティブ・ラーニング実践の意義と留意点が示されている。

1)では、子どもの発達の観点から、3歳児への実際の・同情的な支援から、徐々に問題解決を行わせ、アクティビティーの幅を広げ、就学児に対しては意欲やニーズ、関心に応じて思考を挑発するアプローチを計画するとする。鍵となる概念として、一人ひとりのニーズへの対応、「環境」による学習から人と人との「対話」への移行がある。

CfE では、いわゆる特別支援教育も統合されたカリキュラムとなっている。したがって理由は何であれ、発達過程がゆるやかな子どもに対しても同様に、「それぞれ」のニーズに合わせたアクティブ・ラーニングの実施が原則である。なお、特別な加配は「追加的支援 (additional support)」と呼ばれる、専門家やボランティア組織との連携がなされる。

しかし、やはり就学前課程から小学校への移行は困難をとまなう。2)では、その接続に向けた方策を示している。就学児の段階では、アクティビティーの場面で大人への依存度が減って子ども同士の小グループで作業でき、長く集中できるようになる。しかし一部の子どもは、こうした段階への準備が間に合わない。そこで、①グループ学習導入時期の見極め、②アシスタントや保護者の活用、③スタッフの重点化、④一部の子どもに長期的な「遊び」のスタッフ配置、⑤対話 (口頭言語) の重視、などを挙げている。

「遊び」や多様なアクティビティーが初期の子どもの学習・指導のバックボーンとなり、小学校1年課程終了時には、直接的・双方向的な指導が顕著となる。BtC3 は、こうした過程で、CfE が掲げる4つの教育目標が以下のように合致・発展されうるとする。

- 1) 継続的な学習者：想像力と創造力を用いて、新しい体験に挑戦しかつ学ぶ。自らの関心に沿っ

た探求を通して、読み書きと計算能力を含めた重要なスキルを発展させる。

2) 自信に満ちた個人：活動の成功とタスク達成による充実感をもち、失敗から学び、リスクと上手につきあう。

3) 責任能力ある市民：世界の異なった見方に出会い、共有と公平なやり取り（give and take）の方法を学び、自他を尊重し、決定に参加する。

4) 効果的な貢献者：主導または支援の役割で学び、問題に取り組み、コミュニケーション・スキルを伸ばし、語りと思考を持続させて他者の意見を尊重する。

(3) 小学校接続のためのカリキュラム・デザイン

就学前施設は、初等学校附属のナースリーのような教育施設だけでなく、自助的・私的なナースリーやチャイルド・マインダーなどが混在した状態である。学校を含めて、さまざまな施設やスタッフが CfE を遂行し、初期段階のアクティブ・ラーニングを行うために、BtC3 はわかりやすい指標や考え方を提示している。

BtC3 では、特に就学前施設での学習の「個人化と選択」を強調している。それぞれの子どもの学習の進度や興味・関心、ニーズに合わせて、学習を柔軟に組織する必要がある。また、スタッフも含めて質の高い学習環境・資源を考慮する。既に多くの施設で、「教育」への取り組みや、主に以下のようなカリキュラムの計画がなされているとしている。

○子どもが学習に没頭する環境、学習経験と成果を計画する

○くつろいだ雰囲気、観察やアクティビティーの環境を用意する

○創造力や刺激に富み、自発的な遊びと関係する学習環境

○子どもが一人で、または共同で作業を行う機会を創出する空間、資源を利用する

そして、アクティブ・ラーニングが小学校1年以上まで継続されること、そしてスタッフ、教員の協同のアプローチ……定期的な専門的対話や、知識、情報、アイデア、判断の共有……により、

就学前課程からの移行が保障されるとしている。

学習経験や成果を考慮したアクティビティーのデザインが、初期段階の子どもの発達を保障し、初等教育以降のカリキュラムとの一貫性をもたせることとなる。例えば行事（events）などを通して、教科カリキュラムを横断する学際的で多様なコンテキストをいかに用意できるか、また感情や認識、身体などの全体論的なアプローチと、場合によっては追加的ニーズも包含した一人ひとりの学習支援がいかにかが重要である。そしてこれらの学習支援が、さまざまな施設で協同して行われる必要もある。

以上、CfE と BtC における初期教育、特にアクティブ・ラーニングの構想をまとめた。今後の課題は、スコットランドの最終的なカリキュラム改革の行方と、行政や多様な施設における「アクティブ・ラーニング」の実効性をとらえることである。一方イングランドでは2009年に現行の10の必修教科等を教科横断的な6つの「学習領域」へ再編する初等教育課程の見直し案が出され²⁰⁾、スコットランドとの近似性が高まる見通しとなっている。政権交代にともない、本稿執筆中の2010年10月に新たに教育省も設立される見通しである。過渡期にあるイングランドや EU 諸国の初期教育政策を総体的にとらえていきたい。

1) 本稿で扱う【2】【3】を含めて5冊が公刊されている。1999年のスコットランド議会発足時の‘Scottish Executive’は、2007年5月の名称変更で‘Scottish Government’となった。

2) Scottish Executive (2007), ‘a curriculum for excellence 2: building the curriculum 3-18: active learning in the early years’, Edinburgh: Scottish Executive.

3) Scottish Government (2008), ‘a curriculum for excellence 3: building the curriculum 3-18: a framework for learning and teaching’, Edinburgh: Scottish Government.

4) department for children, schools and families (2008), ‘Practice Guidance for the Early Years Foundation Stage: Setting the Standards for Learning, Development and Care for children from Birth to five (revised edition)’, Annesley: DCSF Publications.

- 5) 埋橋玲子 (2007)『チャイルドケア・チャレンジ：イギリスからの教訓』法律文化社、同 (2010)「幼児教育・保育における『自己評価』の検討：イギリスの評価システムに注目して」『四天王寺大学紀要』第49号、183-195頁 などで特にイングランドの乳幼児政策の詳細とインパクトが「質保障」という文脈で示されている。
- 6) 榊瑞希子 (2009)「イギリスの『家庭的保育』(チャイルドマインディング) 調査 (2) 第三者評価機関 Ofsted と保育の質の保証」『聖徳大学研究紀要 (短期大学部)』(41)、17-24頁 などで保育政策における基準設定と査察の実態が紹介されている。
- 7) スコットランドの新カリキュラムは以下に詳しい。
富田充保 (2008)「分権国家スコットランドにおける『追加的学習支援 (Additional Support for Learning)』政策の性格」田中孝彦他編著『創造現場の臨床教育学』明石書店、218-243頁。久保内加菜 (2008)「スコットランド『卓越のためのカリキュラム』の卓越性：若者の教育をめぐる」『山脇学園短期大学紀要』第45号、72-85頁。前者は「特別なニーズ教育 (SNE)」の発展的改革、後者は中等教育とスコットランド教育単位・職業資格の枠組み (SCQF) との連続性を主題としており、就学前課程の紹介はほとんど見受けられない。
- 8) OECD (2007) , 'OECD Review of the Quality and Equity of Education Outcomes in Scotland: Diagnostic Report', OECD. 以下のサイトより入手可能である。
URL <http://www.oecd.org/dataoecd/2/50/39744132.pdf> (2010年10月確認)
- 9) Scottish Government (2008), 'The Early Years Framework', Edinburgh: Scottish Government.
- 10) Scottish Government (2008) , 'A Guide to Getting it right for every child', Edinburgh: Scottish Government.
- 11) スコットランド学習・指導 (LTS) のサイトより 'George Smuga interview about Building the Curriculum 3' URL: http://www.ltscotland.org.uk/video/g/generic_contenttcm4538535.asp (2010年10月確認)
- 12) Aline-Wendy Dunlop, 'Early Education and Child-care', in T.G.K. Bryce and W.M. Humes (2003), 'Scottish Education: Second Edition Post-Devolution', Edinburgh: Edinburgh University Press, pp.333-341.
- 13) OECD (2007) op.cit.
- 14) Scottish Executive (2004), 'a curriculum for excellence: ministerial response', Edinburgh: Scottish Executive, p.3.
- 15) Her Majesty's Inspectorate of Education (2006), 'Improving Scottish Education: 2002-2005', Livingston: HMIe.「2005-2008年」(2009) が最新版である。
- 16) Anne Hughes and Sue Kleinberg, 'Early Education and Schooling', in T.G.K. Bryce and W.M. Humes (2003) op.cit., p.343.
- 17) ドナルド・ショーン (柳沢昌一、三輪建二訳) (2007)『省察的实践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房 などで実践モデルが紹介されている。
- 18) Scottish Executive (2006), 'a curriculum for excellence: progress and proposals', Edinburgh: Scottish Executive, p.4.
- 19) スターリング大学のクリスティーン・スティーヴン (Dr. Christine Stephen) のプレゼンテーション資料を参照。LTS のサイトより。www.ltscotland.org.uk/.../PlayingDoingThinkingLearningOct3ChristineStephen_tcm4-592926.ppt (2010年10月確認)
- 20) department for children, schools and families (2009), 'Independent Review of the Primary Curriculum: Final Report, Annesley: DCSF Publications

要旨

スコットランド政府による「卓越のためのカリキュラム (CfE)」は、3 歳から18歳まで統合する教育課程の枠組みである。「カリキュラムの構築 (BtC)」のシリーズは、CfE の実践的な手引きであり、「アクティブ・ラーニング」の概念を示している。本稿は、初期段階のカリキュラム改革と、就学前教育と小学1年課程を連続させる支援への留意点の概説を目的とする。1999年の3歳から5歳までのカリキュラムでは読み書きと計算能力がいっそう重視されたが、2007年の BtC2 は、意図的な遊びを含めた「アクティブ・ラーニング」の優先性が高いとした。2008年の BtC3 は、双方向で全体論的な学習方法と、公立や私立、ボランティア組織を含めたあらゆる就学前施設の連携の必要性を述べている。

(2010年10月4日受稿)